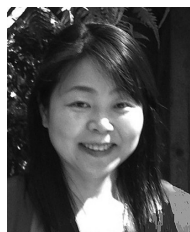


カナで英語音は表現できないが…。



青柳真紀子

第2版でも発音記号に不慣れな学習者のためにカタカナ表記を付した。カナ表記には賛否両論あるが、Mike をミケと読んだり *pseudo* がまったく読めないよりも、/マイク/、/スードウ/と声に出せるほうがよいという考えである。

しかし、カナは日本語なので英語音を表現しきれないのも事実である。日本語にない音は近いカナで代用したり、日本語で区別のない音は同じカナになったりする (æ/a/ʌ/ə=ア, l/r=ラ行, s/θ=サ行など)。また、b/v, z/dz, ʒ/dʒ, l/r をブ/ヴ、ズ/ヅ、ジュ/ヂ、ル/ウルなどと書き分けてはいるが、英語音を知らなければ効果はない。問題は解決しないが、できる範囲の近似値で表記した。

注意点を抜粋すると、母音では、緊張母音 (i:, u:, ɔ:, a:) は弱音節を除いて長音表記だが (*father* /fɑːðər/ ファーザ), “o” 綴りの米音/a/ (英音/p/) は抑止母音相当で短いア (*god* /gɒd/ ガド)。また、二重母音は/tu:/, /tu/ の混同を避けるためにオウなど下付文字は使わずにオウ (*toe* トウ vs. *to* ト) など。子音では、/ŋ/ は下付のングで (*king* キング), 音節末の/m/ はムだが (*come* カム), 唇音が続くとン表記 (*trumpet* トランペット) など。強勢に関しては、第一強勢のみ太字で (*Jāpanése* ジャパニーズ), 機能語は弱形 (原則は太字なし) を先に記している (*for* フォ, フォー)。また、子音から母音へのリエゾンでは語中のみで、ハイフン語や分離複合語ではしていないが、/n/ を閉じない日本語の癖を防ぐため、/n/ から母音は常にリエゾンさせている (*run-in* ウランイン)。

初版との違いでは、わたりの/ə/のア表記をやめ (*serious* 初版スィアリアス→第2版スィリアスな

ど), フル母音での発音防止を意図した。

また、今回増えたのは音節末子音の下付表記で、語中にも採用した (*picnic* ピクニック)。子音後の母音挿入を防ぐ意図だが、リエゾ的な表記が減る代わりに形態素境界が見える利点もある (*black-eyed* 初版ブラカイド→新版ブラックアイド)。母音挿入の恐れのない/n/ (*pen* ペン), 重ね字の/ʃ/ (*dish* ディシュ) は下付の例外にした。さらに、音声的に音節末でも形態素境界を優先したり (*build-er* ビルダでなくビルダ), また発音上の観点から下付にしていない (*Cap-ri-corn* キャブリ..でなくpを止めずにrに繋げてキャブリコーン) など。

そもそも、音節末といっても音節区分は複数ある上、辞書も見出し語内の母音変種による区切変化をたいてい割愛する。つづりや形態素境界、原語彙、音連鎖などとの関係も見ると様々なケースがあり、あちらを立てればこちらが立たずになる。見出し語の境界に基づき、原則に妥当な例外を許しながら、また発音記号との整合性のため多くの妥協をしながらの作業となった。

いずれにしてもカナでは限界がある。*economy* はイカノミかエカノミかと問われても、弱音節ではどちらでもなく中間的というのが近いし、*replay* ウリープレイのウリーは *cab* キャブのキャより実際は短い。*ended* はエンデドと書きたいが、すると *kisses* はキセズでないといけなく (悪くはないが)。ましてや *cotton* をカッシー、*McDonald's* をメッダーノーツとハジケルわけにもいかない。やはり、カナはだいたい、である。少しでも補助になれば幸いに思う。

(あおやぎ まきこ・獨協大学英語学科教授)